

昭和65年2月1日 第3種郵便物認可
平成18年3月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第11巻第9号



俳句雑誌[おき]

9月号

沖 発行所

草 炎

能村 研三

俳句醸造法

岩手洪民

裾雲に 観天望気 夏あけぼの

姫神の 優美線形 梅雨明くる

梅雨明けて 二峰繋ぎの 村にをり

馬込文士村

酒呑みの 孤高派 文士涼新た

洋酒やワインは、寝かせると味が良くなるという話はよく聞く。熟成することで味に深みが増すからだろう。俳句も一定期間、寝かせておいたら、どのようになるのだろうか。ある時、鈴木鷹夫さんが「総合誌から依頼を受けた時は、早めに作ってその作品をしばらく寝かせておくのだ」と言っていた。

私などは時間的な余裕が無いのでいつも締切りぎりぎり、もしくはオーバーランしてしまうのが常だが、ある期間寝かせておく余裕をもった

作句姿勢ということが必要と思っている。

というのも作った句をすぐに発表するのではなく、少し寝かせておく、直情的な思いを沈潜させ、自分を客観視出来るからである。鈴木鷹夫さんは熟成期間を一カ月置くともあると言っていたが、せめて一週間位寝かせて置いたらどうであろう。ただ何も手を加えないでそのままにして置くわけではなく、その間にもう一度自分を見つめなおすことが出来るからである。人間の考えも時間的な経過とともに日々更新され、それらの俳句を作った時期より、もの

奔放な龍子草炎秋立てり

天井の未完の龍に夏惜しむ

絶筆画秋日に乾く絵具皿

秋澄むや龍を描きし岩群青

*岩群青は岩絵具の群青色

高床の画室に届く晩夏光

避暑期去る庭の木椅子の潮傷み

を見る目は進歩していくはずである。

俳句を必死で作っていて、一晩寝た後、翌朝そのノートを見ると、自分の作品の稚拙さに情けなくなることもある。前の晩は全く見えなかったことが、一夜を経ることでは何かが見えてくるからである。

何事にも忙しく追われていると中々余裕はないが、鷹夫流の「俳句醸造法」を真似て、俳句を作ってみよう。

能村 研三



紅一点

林 翔

行かずう

私は生後十箇月で生母けん^{●●●}に死なれたが、父林豊次が後妻よし^{●●●}を迎えたのは、大正七年、私が四歳の時であった。その頃、父は長野市で小学校長の職にあつた。その時期の私の思い出としては、庭に松の大木があつて、枝から落ちた松毛虫が庭を這っていたのを、うっかり踏んだら、青い汁が顔にかかり、ひどく気味が悪かつた事。それ以来私は毛虫嫌いになつた。上京して本郷区（現文京区）の千駄木小学校に通うようになったが、通学の路は桜並木。春はいいが、夏になると毛虫が落ちて這っているから、遠回りでも別の路を通つて通学したことを憶い出す。

優しさとといふ気体かな団扇風
花蛇よ小さき世界の飛行体

老松の影艶美とも灼くるとも

片虹や今降りて来し坂の上

蜥蜴の尾切れてくねりて薄日さす

支部創立三周年を祝ふ館山にて 三句

檳榔樹葉を張り梅雨も今日明けむ

波音の小さき歓声蜻蛉生る

鱧一尾釣れて嬉しとさざら波

奥さんは「行かずう、行かずう」と繰り返しながら周章して後を追って来た由。茨城県龍ヶ崎町（現竜が崎市）に生まれ育った母は、信州の方言を知らなかったのであった。

「行こつ」という意味で「行かずう」と言うのは信濃だけの方言ではないと思うが、古語の「行かむず」の訛り。小学館の『国語大辞典』には「むず」の例として「足の向きたらんかたへいなむず」（竹取物語）が載っている。「去なむず」も「行かむず」も似たような言葉である。

林
翔



蒼茫集



日 覆 辻 美奈子

試歩けふは 酒本八重

日覆のなかにわたしの子を置きぬ
花莫塵にずしりと父の工具箱
台風を海が身籠るうねりかな
浮人形なかのひとつは科学の子
ところてんことのは掬ふやうにせり
海の日^のけふ着るものに海^のいろ

砂の塔 河口仁志

海の日 遠藤真砂明

父の日や親子で築く砂の塔
人待つて待つて噴水見飽きたり
あぢさゐや終の色とも吐息とも
億年の若き地球の星祭
停船の黴殖やしゐる密輸かな

若き師を待つ海^の日の波^の照り
朝漁を終へしばかりの祭酒
子燕のもう身一つの風返し
糠床へ一本刺の初胡瓜
愛知支部へ句碑を訪ふ一語きらりと瑠璃揚羽
味噌桶の籬に土用の力締め

青時間 大畑善昭

くるりくるりと流線の青蜥蜴
定年のなき身よきつく晒布巻き
滴れりイーハトーブの青時間
昼寝して落ち着く虫の居所も
三伏や死相の見ゆる人とみて
汲めよ汲めよと溢れぬる詩の泉

皇居 上谷昌憲

片脚を皇居に入れて虹太し
昭和天皇お手植の松落葉
降れば鳴き霽れば騒ぎ行々子
水貝や空気の読めぬ漢めて
雨粒の突然変異かたつむり
満員電車でナイターのことなど言ふな

半夏蛸 中尾杏子

夜更けてのロシア語講座雨蛙
阿弥陀橋半夏の雨に石しぶく

半夏蛸しこしこ男の子生さざりき
鴨足草齡大事に厨ごと
脱稿の水を一気よ梅雨の星
奥衿に挿す一管の祭笛

裸 松本圭司

反り返る裸が力地曳引く
炎帝が波に乗りくる安房の国
こりこりと水貝を食ぶ潮ぐもり
失ひし時間のやうな山椒魚
寝てゐるか寝たふりか弱冷房車
寂光は太古の蒼さ夜光虫

昼寝 大島雄作

茅の輪立てかけ瑞の山瑞の空
星の恋大阪の空めくらねば
田草取る丹波太郎を背に負うて
子どもらは胸に帆を張り夏休み
魚は目を見開いてをり箱眼鏡
芋虫の蛾になるまでを昼寝かな

潮鳴集



虹二重

横山淑子

自らに問ふこと多し羽抜鳥
またがつてしまふ跳箱麦の秋
万緑や赤子のあくび水泡ほど
虹二重地球に母はひとりだけ
久闊や舌にざらつく麦こがし

睦みあふ

田辺博充

今年竹はやくも雲を挑発す
快癒して向日葵と肩並べけり
桶ぬちに空のゆらゆら四鮎
蚊帳のなか昭和の靄ひみたりけり
七変化かくて神仏睦みあふ

てんと虫

大川ゆかり

てんと虫星を返しに飛び立てり
四万六千日包帯少し汚れをり
だんだんと空が尖る夕立前
香水と声で覚えし人なりし
三者面談冷房少しききすぎる

雷の街

山田三江子

紫陽花の真水の重さもて撓む
雷はしり街の重心定まりぬ
風たちて噴水の音軽くなる
お日柄のよくて生家の屋敷蛇
若竹にふれたる指の軋みかな

沖作品



能村研三選

東京

小嶋 洋子

星涼しくだりはベダル遊ばせて
詩のやうな名は声にする菖蒲園
七月に入るマドラーの響きかな
チヨコレートフォンデュ小雨の巴里祭
夏館貝を透かして灯りけり
黙々と夢を詰め込む花火小屋
梅雨の灯に樺美智子の詩を添へて
知らぬ間に爪伸びてをり梅雨の夜
七月の風も校舎へ始業ベル
七夕の笹に風くる濡れてくる
甚平を着てもひとつの時貰ふ
庇てふ日除の幅をさびしがる
平和とはこんな固まり貝割菜
たたまれて俄に暗くなる日傘
米をとぐ拳ひとつが涼しかり

市川

くらたけん

東京

齊藤 實

菊地 光子

黴の香や奥に主の鼻眼鏡
灰汁ぬきの水溢れさす朝ぐもり
振りて出す陀羅尼助丸走り梅雨
ハンモック先づは力点いな支点
梅雨籠り鬘肩チームの成績表
みなとみらい観覧車でふ夕端居
考へるかたち噴水雌伏して
紋ひそと樹幹にやすめ梅雨の蝶
喪心にしぶく雨粒半夏生
熟れ麦を分けてSL加速せり
夏至の日の一本樗よかりけり
曲線のそろひてゐたる心太
重たけれども葛餅の折二つ
外野手のしきりに払ふ目まどひか
蛇衣を脱ぐ人はウエットスーツ脱ぐ

千葉

大沢美智子

埼玉

服部 早苗

沖作品 15句選評

*

能村研三

星涼しくだりはペダル遊ばせて 小嶋 洋子

私も大の自転車愛好者で、どこへ行くにも自転車が足代わりとなる。昔から「自転車俳句」に良い句は無いとさえ言われているが、私はそれでも毎日の生活そのものなので時々自転車素材にしている。ところで、この句も自転車俳句なのだが、あえて「自転車」という名前は使わないで、省略を効かせた中で一句が構成されている。自転車にとって、坂が多い町での走行は一苦勞。行きは汗を流しながら登り坂を、時には自転車を押しながら登ったのだが、しばらく用を済ませた後、もう夜になっていくらかは涼しくなっていた。自転車で坂道を下る時の爽快さはまた格別なものがある。ペダルも漕ぐ必要もなく、足そのものも翼のように遊ばせて一気に下って行く。心地よい風を受け、眼下に広がる町の夜景も目に入れながら走るのは気持ちが良い。

小嶋さんは、四十代、古くからの会員だが、お子さんの手が離れて、俳句にも本腰を入れられるようになったのが嬉しい。

黙々と夢を詰め込む花火小屋 くらたけん

この句、夜を彩る花火そのものを詠んだものでなく、花火大会に備える昼間の花火師をテーマにしたのがおもしろい。花火を通して、「多くの人を楽しませ、感動と夢を提供する」というような意欲を持った花火師が増えているという。勿論、花火師の仕事は当日だけでなく、花火大会の構想から火薬の調達、配合、星作り、組立、仕上げ、貯蔵までの一環作業があるそうだが、炎天下での打ち上げ準備は肉体的にもかなり厳しい仕事で、小屋での作業も余儀なくされる。何号玉と言われる玉を装填する作業は、素人から言えば夢を詰め込む作業なのだ。ところで、作者のくらたさんも、いつもボランティアでギャラリーの看視作業などを積極的にやっていたいているが、昼間の花火師と同じように人々に夢を提供する裏方の一人である。

平和とはこんな固まり貝割菜 齊藤 實

貝割菜の句では川端茅舎の「ひらひらと月光降りぬ貝割菜」という句や、富安風生の「遠い遠い愛しい記憶貝割菜」という句が有名である。いずれも穏やかなイメージで詠まれているが、貝割菜の語源は貝殻の開いたような双葉というきれいな語感から生まれた。貝割菜が固まっても、何かその存在を強く主張するようなものでもなく、穏やかにまとまっているというイメージからすると平和そのものの感じが頷ける。

(以下略)